東北スタートアップ支援

「T－Biz」で始めよう

社会を変えていくハイテクベンチャーを支える―。中小企業基盤整備機構が運営する東北大学連携型起業家育成施設「T－Biz」の活動が今年で15年目を迎えた。東北大の青葉山キャンパスに拠点を置き、東北大などが有する技術シーズ・知見を活用した大学発ベンチャーの立ち上げ、中小企業の成長をサポートする。現在23社が入居。社会や地域の課題解決に向けて素材、電子デバイス、バイオ、環境、ソフトウエアなど多彩な事業領域での産業創出が期待されている。

ベンチャー集積

社会課題、先端技術で解決

東北大学青葉山キャンパス内に立地する「T－Biz」

「社会課題を解決していく企業を一段と集めたい」―。T－Biz入居企業をサポートする工藤裕之チーフインキュベーションマネージャーは、先端技術を駆使して〝課題〟を解決していくベンチャーの集積を強調する。現在、中小企業基盤整備機構のビジネスインキュベーション事業では、全国29拠点での支援を展開している（22年2月時点）。東北地域における大学発スタートアップ企業育成ビジネスインキュベーターとしては、T－Bizが唯一の施設だ。

運営方法は中小機構東北本部はじめ東北大、宮城県、仙台市、東北経済連合会、東北経済産業局で運営委員会を設置。施設内にはインキュベーションマネージャーが常駐し、各種の支援に取り組んでいる。賃貸面積は約1620平方㍍。36室（オフィスタイプ9室、ウェットラボタイプ27室）を用意している。現在の入居状況（2月17日時点）は、ベンチャー企業23社と大学系支援機関が1機関。入居率は95％となっている。

T－Biz内に設置したプラントで研究開発が進む（写真はファイトケミカルプロダクツ）

入居企業の事業領域は、素材、精密加工、電子デバイス、ロボット、バイオ、環境、ソフトウエアなど。その構成比は偏りがなく、素材から装置開発までにつながる緩やかな異業種連携の素地も形成している。特徴としては、ナノ粒子結晶製造事業、医療用事前診断キット開発（感染症）、手術シミュレーション・カテーテルIoT事業など独自の事業領域をそれぞれ歩んでいる。

T－Bizの開設から15年目。現在は社会を変えていくハイテクベンチャーのサポートに軸足を置く。入居企業の中からは、経済産業省が支援する「J－Startup」企業3社、「J－Startup TOHOKU」には6社が選ばれている。中小機構はじめ支援機関との伴走による挑戦が続いている。

◆　◆　◆

入居問い合わせ＝T－Biz（022・726・5866）へ。

多彩な事業領域での産業創出 期待

伴走支援、各機関との連携 深化

インタビュー

中小機構 東北本部長

杉村 均 氏

地域における大学発スタートアップ育成施設として、07年9月に東北大学青葉山キャンパスに拠点を置いた「T－Biz」。開設から15年目を迎え、その存在意義も変化を遂げつつある。運営主体である中小機構東北本部の杉村均本部長に新たな展開などを聞いた。

◇　◇

―これまでの活動を振り返って。

「大学が持つ『知』の実用化、産業化を進めていくことがT－Bizの大きな役割。これまで大学発ベンチャーなどの支援に努めてきた。大学連携型の施設であり、東北大に限らず大学と連携する企業の成長に取り組んできた。入居企業の成長が日本の産業を創造していくことにつながることを実感している」

―この15年でT－Bizを取り巻く環境も変化しています。

「時代はよりスピードが求められている。大学発ベンチャーが磨いた技術をいかに早く市場に投入できるか。事実上の標準として認められるような存在にいち早くなる。そこがより肝心になってきているように思える。そのために大手企業など外部と手を組んでいくことが一段と重要だ。そうした時代にもなっている。そのためにも提携の仕方などベンチャー経営者のスキルアップとともに経営人材の拡充は欠かせない」

―連携のフェーズでのサポートについて。

「各フェーズでインキュベーションマネージャーや専門家派遣など伴走型の支援を展開している。マッチングもより成功に近づけるよう、出会いの『場』づくりに日々工夫を凝らしている。また各支援機関との連携も深まっており入居企業のサポート体制を高めている」

―今後の支援展開についてはいかがでしょうか。

「ソフト面の機能を高めていく。経営者のスキルアップにつながる経営塾のような形を新たに構築していきたい。ベンチャーを取り巻く経営環境も一段と複雑になる中、各社経営陣の経営力を高める仕組みを考えていく。また、各社の経営人材拡充につながるサポートを中小機構のネットワークや大学とも組んで一段と取り組んでいきたい。スタートアップ支援のコミュニティーが広がっており、連携を強めていく」

経営力向上へ機能強化

T－Biz 入居企業

〝仙台ラボ〟開設

レボルカ

最新の進化分子工学とAI組み合わせ

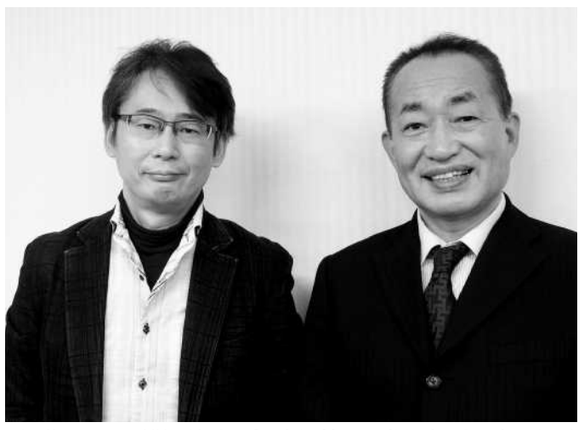
2022年1月に「T－Biz」に〝仙台ラボ〟を開設した21年4月設立のレボルカ（東京都中央区、片岡之郎社長）。最新の進化分子工学（たんぱく質の機能創出）と人工知能（AI）を組み合わせた、バイオ医薬品の開発、解析、製造などを手がける東北大学発ベンチャーだ。東北大青葉山キャンパス内に立地するT－Biz。片岡社長は「大学の研究室が至近で、研究開発が進む」と話す。

同社は最先端バイオ製品のコアとなるたんぱく質をAIで育て、進化させ提供。世界の人々の「健康」と「豊かさ」への貢献を事業目的（ミッション）に掲げる。東北大大学院工学研究科の梅津光央教授が構築した基盤技術を用いて、高効率なたんぱく質設計に取り組む。進化工学と機械学習を組み合わせた「ライブラリーデザインサイクル」と呼ばれる基盤技術が中核になる。梅津教授は最高戦略責任者（CSO）としてボードメンバーに加わっている。

バイオ医薬の開発 効率化

創薬における課題は、一般的に市場投入まで10数年の時間がかかる点。レボルカは創薬の流れの中で、リード分子の成熟化について、ライブラリーデザインサイクルにより、「リードの最適化」（片岡社長）に取り組む。原石（リード分子）を磨き上げ、ダイヤモンド（最適改変体）にする。リード分子の成熟化には従来2年程度の時間がかかるとされ、この部分の検証時間・コストを大幅に引き下げるとともに、確実性を従来探索より大幅に引き上げる解決策を提案する。

当面は大手製薬企業を提携先候補とするビジネスモデルに力を注ぐ。提携の形態は共同研究開発を基本としている。成果物のレボルカ持ち分を提携先にライセンスする形を進めている。



タッグを組む片岡社長㊨と梅津東北大教授

攻守学
CHUSHOKIKO NI KIKOU
中小機構に聞こう！
中小企業基盤整備機構

かの有名な志士たちが、
ここ現代に？！

激動の時代を戦った志士たちのリーダーシップには、
この乱世を戦い抜くためのヒントが、きっと隠されている。

SHISHI TYPE SHINDAN
志士タイプ診断

あなたはどんな経営者？
「志士タイプ診断」で、あなたの強みと弱みを診断！
※人物は架空の設定で史実とは関係ありません

志士たちの経営事例記事、掲載中！
中小機構に聞こう！
https://kikou.smrj.go.jp/

Be a Great Small.
中小機構